

I. 「私の民を行かせて、荒野で私に仕えさせよ」: Let My people go that they may serve Me in the wilderness.

出7:16 そして、彼に言いなさい、『エホバ、ヘブル人の神が、私をあなたに遣わして、「私の民を行かせて、荒野で私に仕えさせよ」と言われます。しかし、今に至るまで、あなたは聞き入れようとされません。**5:1** その後、モーセとアロンは行ってパロに言った、「エホバ・イスラエルの神がこう言われます、『私の民を行かせて、荒野で私への祭りを守らせよ』』。

10:3 モーセとアロンはパロの所に行って、彼に言った、「エホバ、ヘブル人の神はこう言われます、『いつまで私の前に身を低くすることを拒むのか？ 私の民を行かせて、私に仕えさせよ。』

A. イスラエルの子たちは、パロによって強奪されて、奴隷として仕え、エジプト人の目的を遂行していました。

B. パロは、サタンを表徴しているだけでなく、自己と天然の人をも表徴しています。私たちの天然の思い、意志、感情は、神に敵対して反逆し、こうかつに神と取り引きしようとするパロであるかもしれません。

C. 積極的な面で、荒野は分離の領域を表徴しています。神はパロを対処するとき、ご自身の民にそのような分離を要求しました。

II. 「私の民を行かせて、荒野で私への祭りを守らせよ」。「私たちに行かせて、エホバに犠牲をささげさせてください」(出7:16): Let My people go that they may hold a feast to Me in the wilderness; let us go and sacrifice to Jehovah.

出5:17 しかし、パロは言った、「おまえたちは怠け者だ、怠け者だ。だから、『私たちに行かせて、エホバに犠牲をささげさせてください』と言うのだ。

A. 神の目標は分離ではありませんでした。彼の目標は、イスラエルの子たちが、彼への祭りを守って、彼に犠牲をささげることでした:

1. パロに対する神の要求は、彼の民に荒野へと三日の行程を行かせることでした。それは、彼らが神への祭りを守って、彼に犠牲をささげることができるためでした。これは、神の救いを享受することです。
2. 私たちは主の完全な救いのゆえに、神に仕えるために、エジプトの束縛から救い出されました。私たちは今や荒野において、祭りを享受し、神に犠牲をささげています。

B. 神への祭りを守ることは、神と共に神を享受し、神を礼拝することです:

1. 第5章1節の「私への(to Me)」という言葉が示しているのは、神の民が祭りをしているとき、神が幸いであるということです。彼らが祭りをすることは、神へのものです。

2. 人が神と持つことができる最上で最高の関係は、神への祭りをすることであり、また神と共に祭りをすることです。

出23:14 一年に三度、あなたは私に対して祭りを持ち続けなければならない。**17** 一年に三度、あなたの男子はみな、主エホバの御前に出なければならない。

3. 神への祭りを持つことが意味するのは、私たちが神のために、また神と共に祭りをすることです。私たちが祭りをすればするほど、ますます神は享受を持ち、ますます幸いになります。

4. このように主への祭りをすることは、分与の下にある礼拝、すなわち、私たちの中へと分与されたものにしながら神を礼拝することです。

ヨハネ4:14 しかし、私が与える水を飲む者はだれでも、決して永遠に渴くことはない。私が与える水は、その人の内で源泉となり、湧き上がって、永遠の命へと至るのである。**23** しかし、真の礼拝者たちが、霊と真実の中で父を礼拝する時が来る。そしてそれは今である。父はどのように彼を礼拝する者を、捜し求めておられるからである。**24** 神は霊であるから、彼を礼拝する者は、霊と真実の中で礼拝しなければならない。

C. イスラエルの子たちは、主への犠牲をささげるべきでした:

出5:3 彼らは言った、「ヘブル人の神が私たちに会われました。どうか、私たちに荒野へと三日の行程を行かせて、エホバ・私たちの神に犠牲をささげさせてください。そうでないと、彼は疫病か剣で、私たちを悩まされます」。**8** そして、彼らがこれまでに作っていたれんがの量を作らせるのだ。それを少しも減らしてはならない。彼らは怠け者だ。だから彼らは叫んで、『私たちに行かせて、私たちの神に犠牲をささげさせてください』と言うのだ。

このように主への祭りをすることは、分与の下にある礼拝、すなわち、私たちの中へと分与されたものにしながら神を礼拝することです。私たちは神の臨在の中で食べ、飲み、賛美し、歌い、歓喜するとき、彼への祭りを守っているのです。…そのような祭りは、主への犠牲でもあります。

1. 「犠牲をささげる」は、「祭りを守る」と同じ意味の言葉です:

a. イスラエルの子たちにとって、祭りは宴席でしたが、神にとって、それは犠牲でした。

b. 犠牲がなければ、祭りを持つためのものは何ともありません。イスラエルの子たちが祭りを持つためのものは、彼らが神にささげるべき犠牲そのものでした。

2. 神に犠牲をささげることは、彼に何かをささげることであり、神への祭りを守ることは、神と共に彼にささげられているものを享受することです。

Ⅲ. 神の召しの目的は、彼の選びの民を山へともたらすことです。その山で、彼らは神に仕え、神に犠牲をささげることができます: The purpose of God's calling is to bring His chosen people to the mountain, where they may serve Him and sacrifice to Him.

出3:12 神は言われた、「私は必ずあなたと共にいる。あなたにとって、私があるあなたを遣わしたしるしはこれである。すなわち、あなたが民をエジプトから連れ出した時、あなたがたはこの山の上で神に仕えるであろう」。

A. 神は出エジプト記第3章12節において、彼の民が神の山で彼に仕えるようにと言います。

B. 神の山は、私たちが神の定められた御旨に関する啓示を受ける所です:

出24:10 そして、彼らがイスラエルの神を見ると、その足の下にはサファイアの敷石細工のようなものがあり、透き通った天のようであった。

1. イスラエルの子たちは山において、神が何であるかに関して、また神が地上で住まいを持つことを願っていることに関して、啓示を受けました。出25:8 彼らに私のために聖なる所を造らせなさい。それは、私が彼らの中に住むためである。

2. 空が澄み渡っているこの山で、私たちは、神のエコノミーのビジョンを見ます。私たちはここで、神の心に何があるかを知るようになり、神が今日、地上で何を持つことを願っているのかを見ます。

3. 私たちが認識するのは、神が、彼ご自身のおきてにしたがって歩いている人々を、また彼のために幕屋を建造する人々を持つことを願っているということです。それは、神が彼らの間に住むためです。

Ⅳ. 私たちは、神のビジョンにしたがって、また山で示された型のビジョンにしたがって、神に仕えなければなりません: We must serve God according to the vision of God and the pattern shown on the mountain.

A. 私たちは、透明で澄み渡った天において、神のビジョンを見る必要があります。私たちはそのような雰囲気の中にいるときにはじめて、神の住まいを建造するという天のビジョンを受けることができます。

私たちが認識するのは、神が、彼のおきてにしたがって歩いている人々を、また彼のために幕屋を建造する人々を持つことを願っているということです。それは、神が彼らの間に住むためです。

B. 「私があるあなたに示すすべてのこと、幕屋の型とそのすべての調度品の型にしたがって、あなたがたはそれを作らなければならない」(出25:9):

1. 幕屋が建造される前、神はモーセに幕屋とその調度品の型を示しました。

2. 私たちは神に仕えるために、山で示された型を見なければなりません。ヘブル8:5 彼らは天の事柄の模型と影に仕えているのであり、それはモーセが幕屋を完成しようとした時、神から指示されたとおりです。すなわち彼は、「見よ、山で示された型にしたがって、すべての物を造りなさい」と言われました。

3. 山で示された型は、神のご計画です。もし私たちが神のご計画を理解していないなら、神の働きを行なうことは不可能です。エペソ3:4 あなたがたがそれを読むなら、キリストの奥義に関する私の理解を、知ることができます。

4. 召会はキリストの奥義として使徒たちと預言者たちに啓示されたので、彼らが受けた啓示は、召会が建造される土台と考えられます。

V. 契約の血によって、信者たちは生ける神に仕えることができます: The blood of the covenant enables the believers to serve the living God.

出24:8 そこで、モーセはその血を取って民に振りかけ、そして言った、「見よ、これは、エホバがこれらすべての言葉にしたがって、あなたがたと結ばれた契約の血である」。

A. 契約の血によって、墮落した罪深い人である神の民は、贖われ、赦され、清められ、神の臨在の中へと入って、そこにとどまり、神によって注入されることができるようにしました。

B. キリストの血は、私たちが生ける神に仕えることができるようにします。私たちは、キリストの贖う血を通して命を得て、神の臨在の中へともたらされており、神に仕えます。ヘブル9:14 まして、キリストが永遠の霊を通して、傷のないご自身を神にささげられたその血は、なおさら私たちの良心をきよめて、死んだわざから離れさせ、生ける神に仕えるようにさせないでしょうか？

VI. 私たちの奉仕の基礎は、天から来た火としての神です: The basis of our service is God as fire from heaven.

レビ9:24 その時、火がエホバの御前から出て来て、祭壇の上の全焼のささげ物と脂肪の部分を焼き尽くした。すべての民はそれを見ると、鳴り響く喜びの叫び声を上げ、顔を地に伏せた。

6:13 火は祭壇の上で絶えず燃え続けさせなければならない。それを消してはならない。

A. いばらやぶの中で燃えていた火は、三一の神、すなわち、復活の神でした。

出3:2 すると、エホバの御使いが、いばらやぶの中から火の炎の中で彼に現れた。彼がよく見ると、いばらやぶがあり、火で燃えていたが、いばらやぶは燃え尽きなかった。

B. 私たちは、神によって得られ用いられている人たちとして、私たちの天然の人によれば、いばらやぶです。しかしながら、私たちの中には火があります。神は火の中で私たちに来しました:

1. 神の火がいばらやぶの中で燃えていたとき、燃えていたのは神でした。

出3:4 すると、エホバは、彼が道を離れて見に来るのを見て、神はいばらやぶの中から彼を呼んで、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼は、「私はここにおります」と言った。

2. 火の力と輝きは、火そのものから来ます。火はただ、私たちの上にとどまっているにすぎません。私たちの目的は、その火を表現することです。

C. 神への私たちの奉仕は、全焼のささげ物の祭壇から来る火に基づいていなければなりません：
レビ10:1 さて、アロンの子たち、ナダブとアビフは、それぞれ自分の香炉を取って、火をそれに入れ、香をその上に盛って、異火をエホバの御前に献げた。それは、エホバが彼らに命じておられなかったことである。すると、火がエホバの御前から出て来て、彼らを焼き尽くしたので、彼らはエホバの御前で死んだ。

1. 全焼のささげ物の祭壇の上で燃えていた火は、天から下って来ました：

a. その火は、天から下って来た後、絶えず祭壇の上で燃えていました。

b. 私たちは、神聖な火によって、すなわち燃える三一の神によって、奉仕することができます。

私たちの奉仕は、神の火が燃えることから出て来なければなりません。

ローマ12:11 熱心で怠けることなく、霊の中で燃え、主に仕えなさい。

2. 祭壇から来た火は、奉仕の真の動機づける力です。

火はエネルギーの源です。物質の世界で動くすべての物はエネルギーを用い、エネルギーは燃えることを通して生み出されます。私たちの奉仕がエネルギーに満ちるために、私たちの奉仕は祭壇の上の火を経過しなければなりません。これは異火ではありません。

VII. 主は、エジプトからイスラエルの子たちを連れ出して、彼らを祭司の王国とやらせました。その王国の中で、あらゆる人は祭司であり、絶えず神に仕える人です：The Lord brought the children of Israel out of Egypt in order to make them a kingdom of priests, a kingdom in which everyone would be a priest, one who serves God continually.

出19:6 あなたがたは、私にとって祭司の王国、聖なる国民となる』。これが、あなたがイスラエルの子たちに語るべき言葉である」。

A. 出エジプト記第29章は、私たちが救われたのは、私たちが聖別されて、祭司として神に仕えるためであることを啓示しています：出29:44 私は集会の天幕と祭壇を聖別する。またアロンとその子たちを聖別し、私に祭司として仕えさせる。

1. 神の救いの目標は、キリストを信じるすべての人たちを神の祭司とすることです。

啓5:10 彼らを私たちの神のために王国とし、祭司とされたからです。そして彼らは地上で王として支配します」。

2. 祭司である主イエスは、彼の贖いを通して、私たちを祭司職の中へともたらしめました。私たちは祭司であるので、何を行なっているとしても、神に仕えているべきです。啓1:6 私たちを王国とし、彼の神また父の祭司としてくださった方に、栄光と権能が永遠にわたってあるように。

B. 祭司は、ささげ物の実際であるキリストの中で、またキリストを通して神を享受することによって神に仕える人です。

ガラテヤ5:22 しかし、その霊の実は、愛、喜び、平和、辛抱強さ、親切、善良、信実、

I ペテロ2:5 あなたがた自身も生ける石として、霊の家に建造されていながら、聖なる祭司の体系となって、イエス・キリストを通して、神に受け入れられる霊のいけにえをささげなさい。

C. 神に祭司として仕えることは、キリストを食物として神に供給して、神に満足していただくことです。予表において、神の食物とは、神の満足のために彼に献げられた全焼のささげ物でした。

D. 出エジプト記第29章において描写されている祭司の生活の結果は、神が来て私たちと会い、私たちと共に食べ、私たちに語り、私たちの間に住むということです。

出29:42 それは、あなたがたが代々にわたって、集会の天幕の入り口で、エホバの御前に常にささげる全焼のささげ物である。その所でわたしはあなたがたに会い、そこであなたに語る。

VIII. 神の建造は、神の心の願いであり、彼の救いの目標です: God's building is the desire of God's heart and goal of His salvation.

A. 出エジプト記の絵は、神の選びの民に対する彼の心の願いを明らかにしています:

1. 神は幕屋が彼の住まいとなることを欲していました。このことは、神の心の願いでした。

2. 出エジプト記第40章において建てられた物質の幕屋は、団体の民のしるし、すなわち、神の家であるイスラエルの子たちのしるしでした。

出40:2 「第一の月の一日に、あなたは集会の天幕である幕屋を建て上げなければならない。

29 彼は全焼のささげ物の祭壇を、集会の天幕である幕屋の入り口に置き、その上に全焼のささげ物と穀物のささげ物をささげた。エホバがモーセに命じられたとおりにである。34 その時、雲は集会の天幕を覆い、エホバの栄光が幕屋を満たした。

ヘブル3:6 キリストは御子として、神の家を治めることに忠信でした。もし、望むことでの大胆さと誇りを終わりまで堅く保ち続けるのでしたら、私たちは彼の家なのです。

B. 神の家の建造は、祭司職と関係があり、祭司職にかかっています。祭司は神の住まいを建造し、神の住まい、神の家的一部分となります。

C. キリストは神の民の贖いと救いと供給であり、また、神の民が神を礼拝し、神に仕える手段でもあります。それは神の民がキリストの中で神と共に建造されて、神の民と神が会い、交わり、相互に住み合うためです。これが、出エジプト記の中心思想です。

経験(ビジネス・ライフ編):

- ① 出24:10 そして、彼らがイスラエルの神を見ると、その足の下にはサファイアの敷石細工のようなものがあり、透き通った天のようであった。

私は主との交わりの中で、澄み渡った空を持ち、彼の下に透明なサファイアの細工を見ることを好みます。…主とのある程度の経験を持ったことがある人たちは、私が透明で澄み渡った天における神のビジョンについて語っていることに対して、証しすることができます。山の上で神の民はまた神の心の願いの啓示を見ることができます。ここで私たちは、神は私たちが、彼が何であるかにしたがって生きることを欲しておられることを見ます。なぜなら、神の心の願いは地上に住まいを持つことであるからです。

あなたは神のエコノミーについて読んだ後、それについて主と個人的で親密な交わりを持ってください。自分の罪、欠点、弱さを告白し、透明な良心を持って、主と神のエコノミーについて交わりを持ってください。そうすれば透き通った天を持ち、神のエコノミーに関するはっきりとしたビジョンを持つことができます。さらに、ビジョンを持った後、ビジョンにしたがった生活をすべきです。ビジネス・パーソンであるあなたは、職場で自分の夢や欲望に従ったビジネス・ライフを持つのではなく、神のエコノミーに従ったビジネス・ライフを持ってください。金銭欲や出世欲に従ったビジネス・ライフでは、神を享受し、神を表現し、神の権威を代行して支配することはできません。献身を惜しんで中途半端でいい加減なビジネス・ライフを送ってはいけません。ビジネス・ライフにおいて、実際にキリストを経験し、経験したキリストを持って、召会、神の住まいを建造してください。

- ② 神の火が**いばらやぶ**の中で燃えていたとき、燃えていたのは神でした。このゆえに、神は私たちの中にあるものを用いませぬ。いばらやぶは火の燃料ではありませんでした。それは単に火が表現されるための場所にすぎませんでした。火は燃えるためにいばらやぶに依存していませんでした。モーセはこの原則にしたがって、神によって用いられました。…私たちは、自分が**いばらやぶ**にすぎず、神が復活において火として私たちに臨むことを見なければなりません。神は、私たちの中で行ないたいことを行ないますが、私たちは焼き尽くされませぬ。神は火を強める、あるいは火をさらに輝かせるために私たちの才能や私たちの能力を用いませぬ。火の力と輝きは、火そのものから来ます。火はただ、私たちの上にとどまっているにすぎませぬ。私たちの目的は、ただその火を表現することです。

あなたは新約の祭司ですので、ビジネス・ライフにおいて、自分の能力に頼ってはいけません。モーセは極めて有能な人でしたが、神から見ると**いばらやぶ**にすぎませんでした。あなたは神に信頼し、天からの火によって燃えて、主と共に、積極的にさまざまなプロジェクトを推進してください。

612 召會—その建造

1. なんとるしゆくふく、われらはさい司！
かみに立てられて、とうといつとめ負う。
(復)からだのけん造は さい司のつとめ；
霊のなかでいのり、つとめを果たす。
2. けん威にふくして、身ぶんをまもり、
つとめを果たせば、しょう会、建ぞうす。
3. しょう会はさい司団、さい司のたい系；
みな組み合わされ、けんぞうされる。
4. しょう会の墮らくで さい司、荒はいし、
聖徒の霊はよわく、ことばのみある。
5. 預言者にかたより、ことばかたるが、
さい司はいのらず、れい、かつ用せず。
6. いのり、かいふくし、きん衡をたもつ；
いのりとことばでひとをみちびく。
7. いのりによる奉仕、霊にて調和され、
いのり、おもんじて、しょう会、建ぞうす。

848

1. What a blessing, what a priv'lege!
Called of God a royal priest,
That this glorious, holy office
I should bear, though last and least.
All the building of the Body
On the priesthood doth depend;
Ever praying in the spirit
I this office would attend.
2. If I keep this royal calling
Under Thine authority,
Priestly duty thus fulfilling,
Then the church will builded be.

612 召會—建造

1. 何等福氣，何等權利，我是君尊的祭司！
由神所選，為神所立，承擔尊榮的聖職。
(副)祭司職分何等尊榮，召會建造所倚恃；
靈裡禱告，神前事奉，我願如此供聖職。
2. 我若守住君尊身分，權柄、等次不顛倒，
並且肯盡祭司職分，召會纔能被建造。
3. 召會乃是祭司團體，祭司職分不可少；
且須編成祭司體系，纔是真正被建造。
4. 因著召會墮落荒涼，祭司職分被忽視；
因著聖徒靈不剛強，話語職事獨得勢。
5. 人多偏重先知講道，單靠話語的供應；
很少倚重祭司禱告，在神面前運用靈。
6. 主阿，給我厲害平衡，倚重禱告如講道；
對人常用禱告帶領，配同話語的教導。
7. 惟有如此事奉、禱告，叫人靈裡得相調，
看重禱告猶如聽道，召會纔能被建造。

3. Now the church is but the priesthood;
Thus the priesthood formed we need;
When the priests are knit together,
Then the church is built indeed.
6. Deal with me and make me balanced,
As in preaching, so in prayer;
Leading others oft in praying,
As Thy Word I too declare.
7. Only serving by our praying
Will our spirits mingled be;
Stressing prayer as much as preaching-
Thus the church is built for Thee.